

笠翁と兼好法師

章実齋は学者である。しかしながら人生については多くの古臭く融通の利かぬ見解を抱いている。たとえば『婦学篇書後』に説くのがそれである。李笠翁は当然学者ではない。だが彼は生活の方法を心得た人間であって、決して樸学家の及ぶ所ではない、(かなり男尊女卑の言葉があってやはり同様に^{おしえ}訓とするには足りないけれども)。『笠翁偶集』巻六に次のような一節がある。

“ある人が訊いた、‘あなたの意見を執れば、老子の欲すべきを見ざれば心^しを使って乱れざらしめんという説はほとんど誤りではありませんか。’

予は言った。‘まさにこの説に従って参じ来たれば、ただ為に一転語を下さん。欲す可きを見ざれば心^しを使って乱れしめざらん、欲す可きを常に見るも亦た能く心^しを使って乱れしめざらん、と。どうですか。人間は嗜欲を絶つことができ、声色貨利が目の前になかったならば、つまり我を誘う者至らざれば、我自ら人の誘うところと為らずです。——が、假りにも山に入り俗を逃れるのでなければ、どうしてこんなことができますか。もし一日中欲すべきを見ずして一旦これに遇えば、その心が乱れることも欲すべきを常に見ている人の十倍になります。日々に欲すべきものの中にあつてそういう連中といっしょに居て、見慣れてしまいくだらぬ事で日をつぶしているほうがましです。心が乱れないのは欲すべきを見ないで突然欲すべきを見た人とは大いにちがうではありませんか。老子の学は、世を避け何もしない学です。笠翁の学は、家居してやる事がある者の学です。’……”

これは実際性教育の精義だと言える。“老子の学”は結局ただ空想でしかなく、無理にやれば、結果は聖アントニウスがエジプトの荒野であれこれと思案して、夢にシバの女王と悪魔に会い、その心が常人の十倍も乱れたようなものである。余澹心は『偶集』の序で、“冥心^{ふかい}を高く寄せ、千載相い関し、深く王莽王安石の人情に近からざるを悪み、而して独り陶元亮の閑情にして賦を作るを愛す”と言うのはまことに極めて正確な言葉である。

兼好法師は日本の和尚で、十四世紀前半に生まれ、ちょうど中国の元朝に当たり、著作に一部の随筆『徒然草』がある。その一章に云う。

“あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住み果つるならひならば、いかに物のあはれもなからん。世はさだめなきこそいみじけれ。〔原注〕あだし野は墓地の名、鳥辺山は火葬場の所在地。

命ある物を見るに、人ばかり久しきはなし。かげらふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらすほどだにも、こよなう長閑けしや。あかず惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心こそせめ。住み果てぬ世に、醜き姿を待ちえて何かはせん。「命長ければ辱多し」、長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそめやすかるべけれ。

その程過ぎぬれば、貌を恥づる心もなく、人に出で交はらんことを思ひ、夕の陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、ものあはれも知らずなりゆくなんあさましき。”

この老法師は仏・老の常談を説いているのだけれども、実は生活の法を理解しているのであ

る。曹慕管は上海の校長であるが、最近『時事新報』に呉佩孚を論じた文章を発表して、次のように言う。

“関羽が後人に欽仰されたのは、一死に在るのみ、……呉は大将の身分で、巡帥の位に居る、この度果して一死することができたなら、教育界中に賜教を拝受する者多からん。”

死は本来は衆生の自然に対する負債であり、忌避する必要などないし、また欽慕することもない。われわれは兼好法師の老いて死なざるはとても無聊の説に賛成するが、また別に四十まで生きれば必ず首を吊らねばならぬとも、そうしなければものあはれがないなどと考えるとも思わない。曹校長はところが死を（おのずと^{だいおうじょう}寿終正寝の類ではない）珍奇なものとみなして、まるでただ一人が“身を殺して仁を成す”ことを肯いさえすれば、どんな政治・教育等の事業もすべて問題にする必要なく、一筋の祥光が、立ちどころに人心を正に戻し、太平世界を現出できるかのようだ。こうした死の提唱は、実にとてつもなく奇妙である。野蛮人を調べると人を犠牲にして豊年や様々の福利を希求する風俗があるが、まさしく同一の意図である。しかし野蛮人ならよいが、堂々たる校長が呉大将を犠牲にして天に福利を教育界に降さんことを求めるとなると、“将に何を以てか一般の青年を訓練せんとするか、将に何を以てか一般の青年を訓練せんとするか！”だ。（民国十三年十二月）

※初出：1924年12月15日『語絲』第5期